

【翻 訳】

イラズマス・ダーウィン著

「植 物 の 愛」 (6)

出版 1806 年

翻訳 加 藤 芳 子

第 3 編

今や女神は、銀の貝殻を吹き

魔法にかかった谷間を、一層深い調べで揺るがす。

青ざめて露にぬれた草に覆われた、彼女の玉座の周りでは

悲しみや恐れ of 薄い姿が、ひらひらと飛びかい

かすかな溜息が、弦に共鳴してささやき

5

憤りはその剣を、半ば抜いたままとどめる。

「魔女キルケー [オデッセウスに登場] は、墓の周りを三周して足跡を残し
死者の邪魔する歌を、歌う。

聖なる大地の上で、その黒い羽を羽ばたかせ

恐ろしい杖を振り、こだまする墓をたたく！

10

— 星々は荒れた夜空を、弱々しく流れ

臆病な月は、人目を意識し光を抑える。

腹ペコのコウモリとバタつくフクロウは、甲高く鳴き叫ぶ

そして夜中の犬は、声高に遠吠えする！—

— やがて大地は急に口開け、あくびする！— 卑猥^{ひわい}なインプが二人 15

大きな翼広げ、有害な女王にあいさつする。

それぞれ力のある杖に、恐ろしくニヤッと笑って敬礼し

そのススけた手で、魔女キルケーを案内する。

彼らはどンドン下りてきて、弱々しいセイヨウイチイは

多数の朽ち果てていく骨の上に、夜露を落とす。 20

教会の門は、じんわりと開き

門の蝶番は、おもむろにギーッと音を立てる

まるで彩色したガラスを通して、月の光がさすように

巨大な醜い幽霊達が、壁の上で体を震わす。

低いうなり声が、空ろな地面を這^はっていき 25

一步ごとに轟く側廊は、反響する。

明滅するランプの光のもと、守護聖人に囲まれて

忌まわしい笑い声をたてながら、彼らが通り

静かな合唱隊の席の上を動くと、聖堂全体が震える。

(悪霊共は地下で叫び、天使達は天上で嘆く!) 30

神の高い祭壇に、その不敬な行進を向け

不浄な足で、聖なる階段を上る。

清めていないブドウ酒で、聖なる盃を汚し

司教冠と、不敬の大衣をまとい

敬虔^{けいけん}なふりして、その眼を天に向ける。 35

恐ろしい無言劇を演じ、十字架に首をたれ

儀式のふりして、天上の力に懇願し

彼らの悪魔の愛を、互いに誓いあう。

汝ら卑しき者よ、女神の聖なる森から立ち去れ

ピューティアのアポロンの巫女^{みこ}ラウラは、狂気の足取りで動く。 40

アポロンの神に満たされ、その苦しむ胸は溜息をつき

「植物の愛」(6) (加藤芳子)

唇には泡を、眼には激怒を見せ

四肢をくねらせ、髪は荒々しく乱れ

月桂冠から飛び出し、空中に漂う。――

その間二十人の司祭が、エポデ [ユダヤ教の法衣] を身にまとい 45

花輪で飾った、華麗な聖堂を囲み

争う客や、震える国民は

運命の女神の、硬い不安の命令を待つ。

―― 彼女は金色の玉座から、轟くような声で

意図のない言葉と、自らのではない知恵で話す。 50

そうして彼の悪夢のさ中、夕霧の中を

沼地や湖、湿地の上を、この羽のそろわない悪霊は飛回る。

眠りに圧倒され、愛に迷う乙女を探し

彼女の胸の上に降り立ち、にっと笑いそこにすわる。

―― そのようなのが、最近フセーリ [伊の画家] の 55

詩的眼によって、くすんだ空をバックに記録された。

シェイクスピアの、最高の優美さを伴う

彼の大胆な色合いは、実態のない幽霊に姿かたちと場所を与えた。

乙女の赤らんだ顔は、枕からのけぞり

その雪白の四肢はベッドから、しどけなくぶら下がっている。 60

その間さえぎられた、彼女の心拍は

素早い溜息と呼吸困難により、死の中を泳ぐ。

―― すると攻め落とされた町の、叫び声や未亡人の涙や

血に染まった棺の上に横たわる、青白い恋人達や

彼女の逃亡の邪魔をする、険しい断崖や 65

人跡未踏の荒地、星も見えない寒い冬の夜や

ナイフを後ろに隠した、いかめしい目付きの殺人犯が

恐ろしくも次から次へと、彼女の心を [悪夢で] 苦しめる。

その白い四肢には、^{けいれん}痙攣の身震いが漂い
両手に始まり、両足でもがく。 70

唇をわななかせ、叫ぼうとすることができない。
震えるまぶたの中で、おののく眼を見張り
走り、飛び、泳ぎ、歩き、^は這おうとすることが、できない。
眠りの東屋の中では、神の意思は主人ではない。
——彼女の白い胸の上に、この悪魔のサルは直立して 75
座り、ふくれた姿のバランスを保ち
ゴルゴーのような眼を、大理石の球体の中で回転させ
革の耳で、彼女のかすかな叫び声を飲みこむ。

象牙の口ばしと、カギ爪で武装して
インドのイチジクの木は降りてきて、砂の中に飛び込み 80
冷たい忘却と共に、地中に閉じこもって横たわる。

が、汝ら求婚者の列よ、その好色な溜息など気もとめない。
少し前に新たに、美しくなって花咲き
空高く伸び、その羽のような葉を動かす。
——ハンブス川とマニフォールド川 [^{曼尼弗}] が、絶壁の間に囲まれた 85
各々の固い峡谷の中を、ぐるぐる回って進み

透明な線で、薄暗い荒野を分け
その姉妹の流れと、合流しようと急ぐ。
そこでは今でも、銀色の胸をしたニンフ達が
巨大なトール神 [^{北欧神話の雷の神}；^{北歐の農業の神}] の、血にまみれた洞窟を嫌っている。—— 90

——昔、雲を戴くウェットンの山の大理石の子宮の中で
火山の火が、この巨大なドームを持ち上げ
岩石が次々と噴出して、広大にばらばらに堆積し
高い塔や長々とした側廊を形造る。
広々とした、どっしりとした支柱が屋根を支え 95

「植物の愛」(6) (加藤芳子)

巨大な虹の^{ろくざい}肋材が、脇から脇へと広く分岐している。

一方、天からは、ミルク色の流れとなり、一本の鉛筆のように細い
人目を欺く光が降りてきて、宙に浮ぶ岩山や
あんぐり口を開けている、湾を照らし
深い暗闇の、恐怖を輝かせる。 100

— ここではしばしばナイアデス達が、トール神の復活の日に
恐ろしい神殿の近くを、偶然さまよった時
罪もない人の血の流れが、緑の葦のベッドを血の色に染め
川の流れを汚すのを、真っ赤な祭壇から見たものだ。

ヤナギの^{おり}檻の中で、[^{いけにえ}生贄] 死にゆく赤子が泣き叫び 105
母親達の叫び声が、恐れおののく疾風を震わせるのを見た。

その真暗い洞窟からは、地獄のこだまがまねをしてあざ笑い
あたりの岩からは、悪霊たちが勝ち誇って雄叫びを上げる！
— それでもニンフ達は、そっと水から顔を出し、
雪白の肩や青色の髪を、空中に出す。 110

さざ波を立てる流れを、甘美に優雅に泳ぎ進み
羊飼いや鉦夫の歌声に耳を澄ます。

しかし彼方から、あの巨大な洞窟を見つけると
弱々しいヒレで、波間を旋回し

眼をきよろきよろ、心臓もどきどきさせ、後ずさりすると 115
その美しい姿を水中に突っ込み、土の下に姿を隠してしまう。—

彼らの頭のすぐそばでは、小さな渦がいやいやながら沈んでいき
もっと大きな輪がいくつも次々と、水際に押し寄せていく。—
彼らは円材の形をした裂け目の中の、三千もの階段をさまよい
陰気な鉦山の中で暗い道を探し 120

^{さんご}珊瑚の小部屋のような、溶岩のベッドで眠り

碧玉色の魚や、メノウ色の貝殻の上で溜息をつく。

やがて名だたるイラムの庭園 [英国ダービー州] は、その煮え立つ激流を

花の草原や、覆いかぶさる深い森に案内する所では
 明るい春に喜び、わびしい夜に別れを告げ 125
 漂流している大波のさ中で、光に向かって立ち上がり
 輝く巻き毛を振って、広がっていく谷間を辿る。
 真珠のような露のふち飾りのついた、海の緑のマントを
 彼らはふざけて群れをなして、高く聳^{そび}える村のそばで動かし
 泡立つ衣の上で飛び跳ね、ダヴ川の中に突進する。 130

厳しく眼をそらして、ハウセンカが立ち上がり
 青ざめた頬を膨らませ、両手を振りかざす。
 驚いた森は、怒りと憎しみで危険を知らせると
 その赤子達〔種〕を、狂乱した腕から放り出す。
 — そうしてメディア 〔ギリシア神話で太陽神ヘリオスの孫、キルクの妻、
 経、金の半毛皮を手に入れたイアーソンの妻〕 が、危険も恐れず 135
 苦労にも屈せず、生れた土地を飛び出した時
 泣いている祖父と、手招きする友達に逆らって
 夢中で、あの煮え立つ激流の上に降りた。
 一人の赤ら顔の少年が、彼女の優しい唇を愛撫した
 と一人の美しい少女は、彼女の胸を枕とした。 140
 その間空中高い所では、金の宝物が燃え
 「愛」と「栄光」が交代で、船の舵^{かじ}を取っている。
 しかしテッサロニキ〔ギリシア〕の不吉な平野が
 大海原〔エーゲ海〕から、この婦人の半女神を受け取った時には
 勝利のラッパが鳴り響き、祭壇は〔生贄^{いけにえ}で〕燃え 145
 大声の人々は、首長が戻ったのを歓呼して迎える。
 彼女は婚礼のベッドが、新たに飾られているのを怯^{おび}えながら見て
 誇り高きクレウーサ 〔クリオンの娘、
 テレオンの妻〕 が神殿に連れていかれるのを見た。
 彼女がイアーソンの欲得^{ほずかし}ずくの腕の中で
 その美德をあざ笑い、その魅力^{ほずかし}を辱めるのを見た。 150

「植物の愛」(6) (加藤芳子)

彼女の愛しい赤子達が、名誉と帝国から引き離され
人も住まない寂しい外国の地に、引き離されるのを見た。
彼女の美貌が獲得し、その美徳が救った、彼によって。
彼女の愛は拒まれ、彼女の復讐も顧みられないのを見た。——
厳しい目付きで彼女は、この裏切り者の国王をじっと見つめると 155
恩知らず！と感じた。これは汝にとり一番鋭い一刺し。
「天も地も地獄も」彼女は叫んだ
「黄金欲しさに見捨てられた心を、守る事は出来ないのね！」
荒々しくじだんだを踏み、髪の逆立った頭を振ると
地下の穴から、復讐の女神達を呼び出した。 160
大地からゆっくりと、お祭り気分の群集の前に
雲の暗闇の中を、炎の車に乗って
恐ろしげな悪霊達に引かれて、魔法の車が
女王を受け取り、空中で停止すると、炎のように輝いた。——
まるで手を掲げて嘆願する、裏切り者達がひざまづき 165
彼らが感じて当然の、復讐を恐れるように
三回彼女は乾いた唇で、罪なき赤子にキスすると
三回彼女は彼らを、その苦しむ胸に抱きしめた。
ちょっとの間彼女は、白い眼を上げて立ち
それから彼女の震える短剣を、何本も彼らの血の中に突き刺した。 170
「さあ、あなたの炎にキスしなさい！さあ、婚礼の歓楽を分かちあいなさい！」
彼女はこう叫ぶと、彼らの震える四肢を、地面に叩きつけた。
大きく反響する雷鳴が、大理石の塔を揺るがし
赤い舌をした稲光が、矢のような雨を降らせる。
大地があくびする！——音立てて廃墟は崩れる！——万物の上に 175
死は黒い手で、その力強いガウンを広げ
復讐の悪霊達は、その混じった血糊ちのりをがぶ飲みする。
すると地獄は彼らを、痙攣して笑いながら受け取る。

激しい竜巻が、豪音を立て、熱帯のそよ風が
 暑苦しい海辺をなだめる、騒がしい島々のあたりでは 180
 夕暮れがその透明な薄もやを、かすんだ草花の上に広げ
 もやの立ち込めた、野原を覆い隠す頃
 ゆっくりと黄昏^{なすがた}の砂浜や、葉の茂る散歩道の上を
 薄暗い威厳と共に、ヨウシュハクセンが忍び寄る。
 この気味悪い乙女の周りでは、硫黄^{いおう}の小さな渦の中で 185
 軽いガスが戯^{たわむ}れたり、火がついて炎となる。
 もし旅人が、疲れた頭をのせて休めば
 そっとするようなトウダイグサは、苔むしたベッドに付きまとい
 彼女の黒い黒檀を調合し、そっと近づくと
 その呪^{のろ}われた毒液を、旅人の苦しむ耳の中に注ぐ。—— 190
 狂った群れの上に、イラクサはさか棘^{とげ}のある
 矢を放ち、毒のある針を射る。
 そして恐ろしいロベリアの窒息させる息は
 疾風の湿っぽい翼に、死を載せる。
 —— 彼らは恐怖におののく、森を吹き飛ばす 195
 が、彼らの一族の恋人達を、優しくいたわってものにする！——

それでパルミラ遺跡が、彼女の荒地や
 壊れた水道橋や、横たわる神殿のさ中で
 (まるでそよ風の吹く、夜中の明るい月が
 彼女のガランとした塔の中や、銀の月の長い光の糸を注ぎ 200
 朽ち果てた墓や、ぐらつく列柱の上で小さく光り
 彼女の荒地を、拡散性の光線で白く覆うように)
 パルミラはその広大な廃墟の上に、言葉もなく身をかがめ
 その涙にぬれた眼を上げ、震える両腕を無言で広げる。——
 もし人跡まれな崖から、激流が 205

「植物の愛」(6) (加藤芳子)

つかの間のコースを広げ、砂の中に沈もうが

残忍なハイエナが湿った崖の上をうろつき

ヒョウがシーッと音をたて、黒ヒョウがうなり声をあげ

飢えたハゲタカが、羽を震わせて鳴き叫び

カラカラの口ばしを激流に浸し、さっと離れるとしても

210

下では顎^{あご}を泡立て、血生臭い舌をして

やせ細ったオオカミが音立てて飲み、あえぎ、走り去る

サラサラいう水辺では、ライオンがいかめしく忍び寄るが

恐ろしいヘビの音を聞くと、水飲む間も震える。

平野では素早く、ウロコの怪物 [ヘビ] が突進し

215

波打つ尾を、次々と巻きつける。

トサカのある額を、湖の上にかがめて

下で口開け待っている、ワニに飛びかかる。